

令和 2 年 11 月 29 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 平成 29 年度

受付番号 201860189

氏 名

大竹 裕子

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地： オックスフォード （国名： 英国 ）
2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。
紛争地コミュニティにおける相互扶助とウェルビーイング
3. 派遣期間： 平成 30 年 6 月 22 日 ～ 令和 2 年 9 月 21 日（ 823 日間）
4. 受入機関名及び部局名
受入機関名： オックスフォード大学
部局名： 人類学研究院（医療人類学）

(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)

(注)「6. 研究発表」以降については様式 10－別紙 1～4 に記入の上、併せて提出すること。

海外特別研究員の期間中に行った 3 つのプロジェクトについて報告する。

1. ルワンダのコミュニティ復興に関する研究

プロジェクト全体の概要

海外特別研究員として実施した研究プロジェクト『紛争地コミュニティにおける相互扶助とウェルビーイング』は、ロンドン大学大学博士課程で行った研究プロジェクト『紛争後ルワンダのコミュニティ・レジリエンス』のサブ・スタディである。本プロジェクトは、①ルワンダにおける「ジェノサイドとその後の影響」を草の根市民の視点から捉え直すこと、②植民地史を背景とした「紛争地に対する援助の在り方」を問い直すことを主な狙いとしている。

①について、ルワンダは、1994 年にフツ政府軍・民兵によるツチ族に対するジェノサイドが起きたことで知られる。その後、ツチ政府軍からフツ族に対する報復殺戮も起き（1994～1997 年コンゴ難民キャンプにおける報復殺戮、1997～2000 年ルワンダ北西部における報復殺戮）、フツ被害者の 5 人に 1 人が孤児となった。だが、これらの事実は現ツチ政権によって隠蔽され、フツ被害者は抑圧されてきた。この報復殺戮について語ることは法的に禁止され、今日に至るまで、語ったために投獄、暗殺された者や、暗殺の危機に晒され政治難民となった者も多い。フツ被害者コミュニティは国際社会からも認知されず、適切な援助を受けることができない。本研究プロジェクトは、この被害者コミュニティを対象として、彼らの被害体験及び、援助が受けられない条件下での自治的な復興を学術的に整理して意味づけ、将来の紛争地援助の指針とすることを目的としている。

さらに②として、国際社会による紛争地援助や開発援助を、植民地史の背景に照らして考察している。従来、援助を行う欧米諸国(旧宗主国側)に対し、それを受け入れる紛争地(旧植民地側)は、貧困、教育レベルが低い、開発途上、問題に満ちているといった否定的ラベリングがされがちであり、紛争を生き延びて来た人々の強さや心の豊かさ、知恵を出し合い助け合う生き生きとした側面は見過ごされてきた。また、欧米諸国で「正しい」とされる価値観を押し付けられ、その土地の人々にとって本当に必要で意義のある支えとは何かが十分問われずにきた。本研究プロジェクトは、コミュニティの持つ肯定的な側面を描き出すことで否定的な観方を是正し、国際援助における権力構造を転換することに貢献しようとするものである。

研究状況

事前の博士研究において、コミュニティの相互扶助が復興に重要な役割を果たしていること、さらに、相互扶助は世代間を越境し、死をも超えて継承されうることを見出した。すなわち、扶助の受け手は、与え手の死後もその子孫に対して恩恵を返そうとする。この「世代間相互扶助の連鎖」が、長期的な民族和解と平和構築につながるのではないかと考え、海外特別研究員としてポスドク研究を行った(写真 1)。2019 年に行った調査から明らかになった内容を以下に簡単に述べる。



写真 1. 農村の風景

まず「世代間相互扶助の連鎖」は、加害者が扶助の与え手、被害者が受け手になったり、またその逆になったりしながら人々の社会的アイデンティティを変容させ、加害者でも被害者でもない「誰かを助けた人」としてのその人物の物語りを紡ぎ出す。人々はそれを子孫に語り継ぐことで、未来へと向かう長期的な癒しと和解を形づくろうとしていた。逆に、祖先から伝え聞いた過去の物語りは、語り手がその人物を直接記憶するあいだ(約 3 世代)は互惠性の保証となるが、ジェノサイドに象徴されるように裏切られることもある。

そこで、裏切りを予防するための装置を人々は様々に編み出そうとしていた。調査して最も興味深かったのは、親族関係を高度に組織化させることで世代間相互扶助を保証し、さらには民族でも国民でもない「氏族」としてのアイデンティティに戻ろうとする草の根の動きだった。人々は携帯電話のアプリを利用して氏族グループを形成し、組織化して連絡を取り合いながら、様々な係分担、

イベント開催、共同貯蓄講の運営などを行っていた。現政権は、ジェノサイド後に民族を廃止し「ルワンダ人」という国民アイデンティティによる統合を図ってきた。その政策には、国民・国家を強調する欧米援助国の影響も窺える。これに対し、草の根の人々が戻ろうとする「氏族」は、多民族混合型の親族体系に基づくアイデンティティである。植民地化以前から存在していた社会の構成単位だが、植民地化、ジェノサイド、その後の統合政策を経て弱体化した。氏族への回帰は、政治的に押し付けられたものではない、自らのルーツに戻ろうとする民衆の動きと見ることができる。

さらに、民族や被害者・加害者アイデンティティを超えてゆく復興の道として伝統医療にも着目した。近年、国際保健における伝統医療の位置づけは大きく変化し、地域医療の重要な担い手として医療制度に取り入れる国が増えており、ルワンダもその一つである(写真 2)。調査では、ツチ族のジェノサイド被害者は公認の「被害者」として病院で精神的後遺症の治療を受けるが、フツ族被害者はこの枠組みから外れてしまうことが分かった。彼らの苦しみを緩和する地域のセーフティネットとして伝統医療が機能していた。伝統医療は植民地史以前から続く、在地文化に根差した医療体系であり、伝統医療が苦痛緩和につながるのは、患者自身の精神的ルーツや文化的アイデンティティに立ち戻ることを助けるからである。その点でやはり、民族や国民アイデンティティに対するオルタナティブを提供する社会的装置ともいえる。これについては、さらに追及するため、英国での競争資金 Wellcome Trust に応募した(詳細後述)。



写真 2. イネス・ルヘンゲリ大学の植物園。伝統生薬を栽培する。同大学では、政府と連携して伝統医療従事者に対する医療教育プログラムを実施している。

成果公表

海外特別研究員の期間中に発表した学術論文とその要約を下に英語で示す。Social Science & Medicine (ハーバード大学、米国)、BMJ Global Health (イギリス医師会、英国)、Transcultural Psychiatry (マギル大学、カナダ) を含む国際誌に計 7 本を投稿した(掲載済み 5 本、査読中 2 本)。

特に、Social Science & Medicine 誌(ハーバード大学)に掲載された『*Suffering of silenced people in northern Rwanda*』は、研究者・政策関係者が参加する SNS「ResearchGate」上で 2019 年に最もよく読まれた論文の上位 2% に記録された。

同論文を読んだ在ルワンダ英国大使館及びドイツ大使館から連絡を受け、ルワンダに対する今後の援助方針について意見を求められた。ドイツ大使館はその後、ルワンダに対する援助を見直し、ツチ政権と癒着の強い組織への資金援助を停止した。英国大使館からは、英国政府向けの啓発セミナーの共同開催やフツ被害者支援などを含む一千ポンドのプロジェクト予算の申し出があった。コロナウィルスの影響で現在は保留中だが、今後、前向きに進めて行きたい。

2020 Yuko Otake, Fabien Hagenimana. 'Gift economy and well-being: lessons from ethnographic research of Rwandan grassroots communities.' Sustainable Development. (under review)

This paper shows that well-being can be maintained by a gift-economy, with small-income and small-consumption, when nature is abundant and social services are well-established. Findings contributed to the development of policy for degrowth and an alternative to GDP. I designed, researched and wrote the paper; the co-author assisted data-interpretation and writing.

2020 Yuko Otake. 'An ethnographic study of community recovery in post-conflict Rwanda.' Japanese Journal of Community Psychology. (under review)

This paper describes the ways in which local communities recover from the aftermath of conflict when they have extremely limited international and government assistance. Findings highlighted cultural and traditional assets as symbols of communal memories and identity that facilitate healing and reconciliation. I am solely responsible for this research and publication.

2020 Tan Mengxin, Yuko Otake, Teisi Tamming, 'Local experience of using traditional medicine in northern Rwanda: a qualitative study' BMC Complementary Medicine and Therapies (awaiting publication).

The paper advanced the theory of medical pluralism, explaining why local people heavily use traditional healing despite the well-established conventional healthcare system, and informed the policy of traditional medicine

integration in Rwanda. I supervised the first author, my masters' student, and contributed to study-design, data-analysis, and writing.

- 2020 **Yuko Otake**, Teisi Tamming. 'Sociality and temporality in local experiences of distress and healing: ethnographic research in northern Rwanda.' *Transcultural Psychiatry*. <https://doi.org/10.1177/1363461520949670> (fully published)

This paper advanced theoretical understanding of post-conflict mental health recovery in Africa by linking social activities to hope and future creation and proposing a theoretical explanation for why creative social activities are therapeutic. I researched and wrote the paper; the co-author assisted on the literature review during peer-review.

- 2020 Teisi Tamming, **Yuko Otake**, 'Linking coping strategies to locally-perceived aetiologies of mental distress in northern Rwanda' *BMJ Global Health* 2020;5:e002304. doi:10.1136/bmjgh-2020-002304 (fully published)

This paper advanced theories of medical pluralism and placebo effect by revealing that patients' perception of the effectiveness of different treatments, either biomedical or traditional, depends on the treatment meeting their needs and causal attribution. I supervised the first author, my masters' student, and contributed to study-design, data-analysis, and writing.

- 2019 **Yuko Otake**. 'Suffering of silenced people in northern Rwanda.' *Social Science & Medicine* 222; 171-179. <https://doi.org/10.1016/j.socscimed.2019.01.005>. (fully published)

This paper showed how Rwandans suffer from post-genocide revenge massacres that were hidden from the international community, and how ongoing dictatorship prohibits their mourning and grief. My recommendation, mourning for all, is being implemented by British High Commission Kigali. I am fully-responsible for this research and publication.

- 2018 **Yuko Otake**. 'Community resilience and long-term impacts of Mental Health and Psychosocial Support in northern Rwanda.' *Medical Sciences* 6(4), 94. <https://doi.org/10.3390/medsci6040094> (fully published)

This paper showed that international assistance has increased ethnic division in Rwanda. Long-term biopsychological education targeted only one ethnic group, generating gaps in our understanding of mental health in other ethnicities. I recommended mobilising cross-ethnic knowledge and resources within communities to fill the gap. I researched and wrote the paper.

2. パレスチナ難民に関する研究

研究状況

国連パレスチナ難民救済機関（UNRWA）より依頼を受け、パレスチナ難民の医療保健課題に関する共同研究プロジェクトを行っている。2019年3月に現地視察を行い、2019年10月に筆者の指導したロンドン大学修士課程の卒業生2名を調査担当インターンとしてUNRWAに派遣した。調査プロジェクト立案及び実施準備の後、2020年9月から11月現在までフィールド調査を進めている。

成果公表

現在、収集しているデータを2021年前半に分析し成果公表する予定。



3. 日本の性暴力に関する研究

研究状況

性暴力被害当事者・支援者団体より依頼を受け、日本の性暴力刑法改正と支援政策に資するための調査研究を2017年1月から2020年6月に実施した。

成果公表

調査結果をまとめた書籍、『性暴力被害の実際—被害はどのように起き、どう回復するのか』（金剛出版）を出版した（左写真）。出版から3カ月で初版が売り切れ、第二版が刊行された。

衆議院議員会館、法務省「第7回性犯罪に関する施策検討に向けた実態調査ワーキンググループ」(http://www.mo.j.go.jp/hisho/saihanboushi/hisho04_00019.html)等で調査結果を共有した。海外特別研究員の期間中に発表した論文3本、書籍1冊の内容を下に示す。

- 2020 Kaori Okamoto, Azusa Saito, **Yuko Otake**. 'Reporting Sexual Assault to the Police: A Qualitative Analysis of Interviews With Victims.' Bulletin of the Faculty of Human Studies Seisen Jogakuin College (17), 25-49, 2020-03-15. <http://id.nii.ac.jp/1048/00000506/> (fully published)

This paper is part of a series from the sexual violence research I lead in Japan. It revealed victim's help-seeking behaviour in relation to the police and provided evidence to build a support system in the country. I am responsible for the study design, data collection and analysis, and some of the writing.

- 2019 Azusa Saito, **Yuko Otake**, 'What is "consent" for Japanese women? Exploring the processes through which sexual violence happens from a women's point of view.' Annals, Public Policy Studies 13; 185-205. <http://hdl.handle.net/2115/74441> (fully published)

This paper proposed a culturally-tailored definition of sexual violence based on qualitative evidence to resolve the debates on how to define 'consensual sex' between victims and policy-makers, and informed policy and law reform in Japan. I am responsible for the study design, data collection and analysis, and some of the writing.

- 2019 Azusa Saito, Kaori Okamoto, **Yuko Otake**. 'Perceptions of sexual violence and its effects on life: qualitative research for building support systems in response to sexual violence.' Research of school crisis and mental care 11; 32-52. <https://ci.nii.ac.jp/naid/120006631354/> (fully published)

This paper revealed the impacts of sexual violence and help-seeking behaviour, and provided evidence to build a support system in the country. I am responsible for the study design, data collection and analysis, and part of the writing.

- 2020 Azusa Saito, **Yuko Otake** (Eds.) 'Sexual Violence: how women are victimised and recover from the violence.' Kongo Publication, Tokyo, Japan. (fully published)

I co-edited this book with a local partner to provide qualitative evidence for law reform of sexual violence in Japan. I designed the study, organised the research team, supervised all data collection and analyses, and proposed policy recommendations. I co-authored 6 chapters, four of which I wrote as the first author.

- 2020 Azusa Saito, **Yuko Otake**. Chapter 3. Entrapment: a social process of sexual violence. In: Azusa Saito, **Yuko Otake** (Eds.) Sexual Violence: how women are victimised and recover from the violence. Kongo Publication. (fully published)

- 2020 Tomoyuki Kaneta, **Yuko Otake**. Chapter 4. Social immobility: sexual violence in social relationship and power dynamics. In: Azusa Saito, **Yuko Otake** (Eds.) Sexual Violence: how women are victimised and recover from the violence. Kongo Publication. (fully published)

- 2020 **Yuko Otake**, Azusa Saito. Chapter 11. Boundaries between violent and non-violent sex. In: Azusa Saito, **Yuko Otake** (Eds.) Sexual Violence: how women are victimised and recover from the violence. Kongo Publication. (fully published)

- 2020 **Yuko Otake**, Azusa Saito. Chapter 12. Recommendation to the law, policy and society. In: Azusa Saito, **Yuko Otake** (Eds.) Sexual Violence: how women are victimised and recover from the violence. Kongo Publication. (fully published)

4. その他

- 博士論文の翻訳作業・・・博士論文を日本語で出版するための翻訳作業を併せて行ってきた。全8章中5章分が翻訳済み。残りの章は日本の読者に合わせて簡潔に書き換える予定。
- 学生の指導・・・2019年から現在まで修士学生4名、博士学生1名を指導し全員が卒業した。うち2名は筆者の研究の追跡調査を行い、修士論文を執筆後、学術雑誌に投稿した。
- 国際誌論文の査読・・・『BMJ Global Health』『Transcultural Psychiatry, Journal of Contemporary African Studies』『International Journal of Mental Health & Psychiatry』『Sustainability』『Japanese Society of Health Education and Promotion』など計6本の論文の査読を依頼され行った。

5. 今後のキャリア

海外特別研究員の期間中、博士論文を学術論文に直して投稿しつつ、次の大型研究プロジェクトの計画を練り、英国の医療系研究競争資金としては最も競争率が高く難関とされる Wellcome Trust に応募した。審査は1次から3次までであるが、幸運にも最終審査まで残ることができ、現在は最終審査に向けた準備をしている。非常に多くの同僚・先輩たちから支えられ指導を受けてここまで進んで来ることができた。

Wellcome Trust のフェローとして選ばれると、英国で研究者としてキャリアを伸ばす上で極めて有利になるだけでなく、「Tier1 グローバル・タレント・ビザ」と呼ばれる、学術や芸能で特に秀でた人材に与えられる特別ビザが発給され、永住権を得ることもでき、研究者としての活躍の場と可能性が一層、広がる。

良く練られた研究計画、質の高い論文を複数本刊行していること、政策に影響を与える研究成果を持っていることは、Wellcome Trust のフェローとなるには必須の事項だが、これらを満たすことができたのは、海外特別研究員として非常に恵まれた立場と環境を得ることができからだと思っている。Wellcome Trust 審査員からもこれらの点を非常に高く評価された。コメントの該当部分を以下に転載する。

Review 1: This is an application from an impressive candidate whose work shows strong commitment to the community that they are working with. ... I've recommended the application for an interview and wish her good luck with the work!

Review 2: The candidate seems excellently qualified to carry out this proposal. Her training and research experiences are a very good fit, and she has relevant networks in, and knowledge of, the regions in which she plans to carry out her fieldwork. For someone who has earned her PhD only 3 years ago, the candidate has an excellent publication record focusing on healthcare in conflict-affected areas, often giving a voice to marginalised views and populations. ...

Review 3: I'm extremely impressed by Otake's work to-date. Her scholarship combines in-depth empirical work with conceptual flair and a keenness to engage with and inform policy (something with which she has had demonstrable success). It's clear to me that the work proposed represents an exciting intellectual and empirical step-change from her previous work, while also being carefully framed by and grounded in her experience thus far. ...

海外特別研究員として十分な研究資金と給与を2年3カ月間与えられたことで、論文執筆と研究計画立案のために存分に時間を使うことができたことが大きな支えとなった。海外特別研究員制度があったおかげで開かれた道であり、この場をかりて深く感謝を申し上げたい。